



TITLE:

京都大学教養部A号館増築予定地内 埋蔵文化財発掘調査の概要

AUTHOR(S):

小野山, 節; 中村, 徹也

CITATION:

小野山, 節 ...[et al]. 京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要. 1976

ISSUE DATE:

1976-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151825>

RIGHT:

京都大学教養部 A 号館増築予定地内

埋蔵文化財発掘調査の概要

昭和 5 / 年 2 月

発掘調査担当

京都大学埋蔵文化財調査室

小 野 山 節

中 村 徹 也

I. 調査の経過

本調査は、京都大学教養部構内 教養部 A号館増築工事に先立つ、予定地内約750 m² における遺跡確認の調査として行なわれた（図一ノ）。

調査関係の要領はつぎのとおりである。

調査対象地 京都市左京区吉田二本松町
京都大学教養部構内 A号館南棟増築予定地

調査主体者 京都大学総長 岡 本 道 雄

調査担当者 京都大学埋蔵文化財調査室
小 野 山 節
中 村 徹 也

調査協力者 京都大学教養部
同 施設部

調 査 期 間 昭和50年7月15日～8月30日

調 査 面 積 約 750 m²

なお地質に関しては、奈良大学助教授池田 碩氏に、すでに採集されている教養部構内出土資料に関しては、京都大学教養部教授藤岡謙二郎氏のご教示をえた。

昭和47年10月同構内教養部図書館建設工事の際に、工事現場の掘さく断面にのぞいた溝状遺構から、縄文式土器片および弥生式土器片が発見された。これを契機に京都市が、教養部グラウ

ンドを除く構内東半部地域を「周知の遺跡」に指定した。

それ以後基幹整備工事に伴う2カ所の立会い調査が行なわれ、ようやく同構内の資料が少しずつ蓄積されてきた。

これらの結果から推すと、同構内は京都大学北部構内とほぼ同様に、地表下約1 m内外に歴史時代遺物包含層が拡がり、その下方に先史時代遺物包含層が存在する可能性が考えられた。

本調査に先立つて教養部構内東半部の200分の1の地形測量図を作成し、同時に構内3カ所に国土座標に基づく基準点を設置した。

この基準点にしたがつて調査対象地域に10 m方眼グリッドを9カ所設定し、6カ所のテストピットの位置を定めて、まずこれを掘り下げた。設定した10 m²グリッドは、9つの方眼となり、東から西へE区・C区・W区、北から南へ1区・2区・3区としてこれを表示し、グリッド名はこれを合わせて呼ぶことにした(例 W-1区・C-2区、各グリッド東北隅の杭に表示)。ただしW区のみは10 m×5 mの長方形グリッドとなつた(図-2)。

テストピットを掘り下げた結果一様に地表下約50 cm ~130 cmにわたつて歴史時代遺物包含層が検出され、その直下の黄色砂層以下は砂礫層が互層となつて厚く堆積していた。しかし当初予測した先史時代遺物包含層は地表下約6 mに達しても検出されず、その存在が否定的となつた。

この結果に基づいて地表下50cmの攪乱層を機械力で除去し本調査を開始した。

調査は前述したとおり砂礫層上方の歴史時代遺物包含層に重点を置いた。

8月30日45日間にわたる調査を完了した(写真-1)。

I. 地形と層位

調査地域は、東方吉田山の洪積層山塊の西斜面裾部にあたり、広い意味での北白川扇状地南端付近に位置している。

テストピットによると、地表下約130cm以下の各層は、東山花崗岩山塊から白川によつて押し流され堆積した所謂白川砂と小礫が互層になつて続き、地表下約6mに至つても洪積層に到達しない。

洪積層を断ち切つて、白川の流れが沖積扇状地を形成した可能性が強い。砂層の最後の堆積年代がいつであつたかについては、砂礫層中から遺物の発見がまったくなく不明である。しかし直上の遺物包含層が、同層内採集遺物から推して中世以後の堆積層であることから、少なくともそれ以前であり、またこの付近の沖積扇状地上は、縄文・弥生時代の人間の生活の舞台ではなかつたようである。

歴史時代遺物包含層は、前述のとおり地表下約50cm～130

cmにかけて見られるが、第三高等学校校舎基礎のため全地域にわたって著しく攪乱をうけていた。そのため残存状況はきわめて悪かつたが、大きく2つの層に分けることができた。包含遺物からみて、上方第Ⅰ層は陶磁器類を主体とした近世の堆積層であり(南北断面図ノ区一2、2区一ノ、3区一2、3、東西断面図〇区一2)、次の第Ⅱ層は、瓦器、土師器、瓦類を多く包んだ中世の堆積層と判断できる(南北断面図ノ区一黒色土溝、2区一2、3区一4、5)。

Ⅲ. 遺 構

全域にわたって人工的な攪乱が著しく、そのために遺構の残存状態はきわめて悪く、とくに第Ⅱ層に相当する各層の上面での遺構の検出はほとんど不可能であつた。

遺構として何らかの形状をとらえられることができたのは、第Ⅱ層各層下面すなわち黄色砂層上面であり、近世および中世の遺構は、この砂層にまで達しているもののみ検出可能という悪い状態であつた。

検出された遺構は溝状遺構である。真北よりやや東に振つた角度で南北に走行し、これとほぼ直交する。Ⅱ一ノ区・〇一ノ区・〇一2区において比較的良好に残つていた。

〇一ノ区では、黄色砂層に切り込んだ幅約ノmの東西溝ノ条と、

これを切つて南北に走行する幅約30cm 深さ10cmの3条の溝がある。前者は黒色および暗褐色土が堆積しており、中世の溝と思われる。溝の肩に瓦器の羽釜が伴っていた。後者は暗褐色砂質土が堆積しており、前者の溝を切っており、中世以後の溝である。近世陶磁器片が発見されることからみて、近世の溝と考えられる。この両溝は南側のC-2区に入つても平行位に続いて検出された。中世の溝はE-2区に入つて南へ分岐するが、残りはよくない。断面は浅いU字形である。

C-2区に東西方向に走行する1条の溝がある。深さ約40cmのV字溝であり、同区西端で南に屈曲する(写真-2)。土師器片や軒瓦片を包含しており、中世の溝と考えられる。

全体的にこれらの溝の性格は不明で、これらに付随するような建築遺構等も検出されなかつた。W-1区・W-2区の西端に幅の広い深さ1mを越すV字形断面の大溝が南北方向に走っている。黄砂を切り込んだものであるが、時期も性格もよくわからない。過去図書館建設に伴つて発見された縄文式土器片等を包含していた溝の北延長線上にほぼあたるところから、昭和47年に発見された縄文式土器片等はこの溝内の堆積土中に混入していたものと思われる。

Ⅳ. 遺 物

歴史時代包含層は大別して2層に分けることができる。出土遺物から上方第Ⅰ層が近世、下方第Ⅱ層が中世と判断する。すべて遺物はもとの形状をとどめない小片であるが、各層ごとに簡単に代表的なものを記す。

(第Ⅰ層包含遺物)

- ① 押型人形片々個：押型で作られた小さな土人形である。仏像あるいは神像とも思える。他に社^{ヤシロ}がある。北部構内でも同種のものが発見されており、寛永通宝と伴出しているところから、江戸時代以降のものと思われる。
- ② 陶磁器片約80片：所謂陶磁器で、湯呑み茶碗、皿および摺鉢などの日用雑器類が多い。陶器の絵付けは、淡いくすんだ藍色である。

(第Ⅱ層包含遺物)

- ① 瓦 類： 軒丸瓦片3個。三つ巴文1個と菊花文2個。ともに鎌倉時代を遡らないものである。軒平瓦片6個。連巴文1個と唐草文5個。軒丸瓦と同時期とみられる(写真一3)。他に平瓦、丸瓦片多数。
- ② 硬質土器片約50片：須恵質の杯、皿、甕が大部分をしめる。復原完形品なし。
- ③ 土師器片約200片：灯明皿が圧倒的に多い。他に皿、椀

類がみられる。

- ④ 瓦器片約50片：三足付土鼎、土鍋、羽釜などの破片である（写真一々）。

- ⑤ 石鍋片：滑石製の石鍋片2個。

これらの出土遺物は北部構内調査においても多数出土している。北部構内資料の整理をまつて、さらに細かく時期区分できるものと思われる。

V むすび

発掘調査前に予想していた先史時代遺構および遺物包含層がまったく同地域においては見られなかつた。したがつて、先史時代遺跡の存在を予測した「周知の遺跡」教養部構内地域は、むしろ歴史時代遺跡にとどまると断言してよい。

歴史時代遺構および遺物は、近代～現代の攪乱により寸断され、きわめて貧弱なものであつた。しかし少なくとも遺構の存在することは確認できた。とくに中世には、軒丸瓦、軒平瓦を伴う建築遺構がこの近辺に存在した可能性が伺われる。今後の周辺調査の機会をまちたい。

圖面・写真

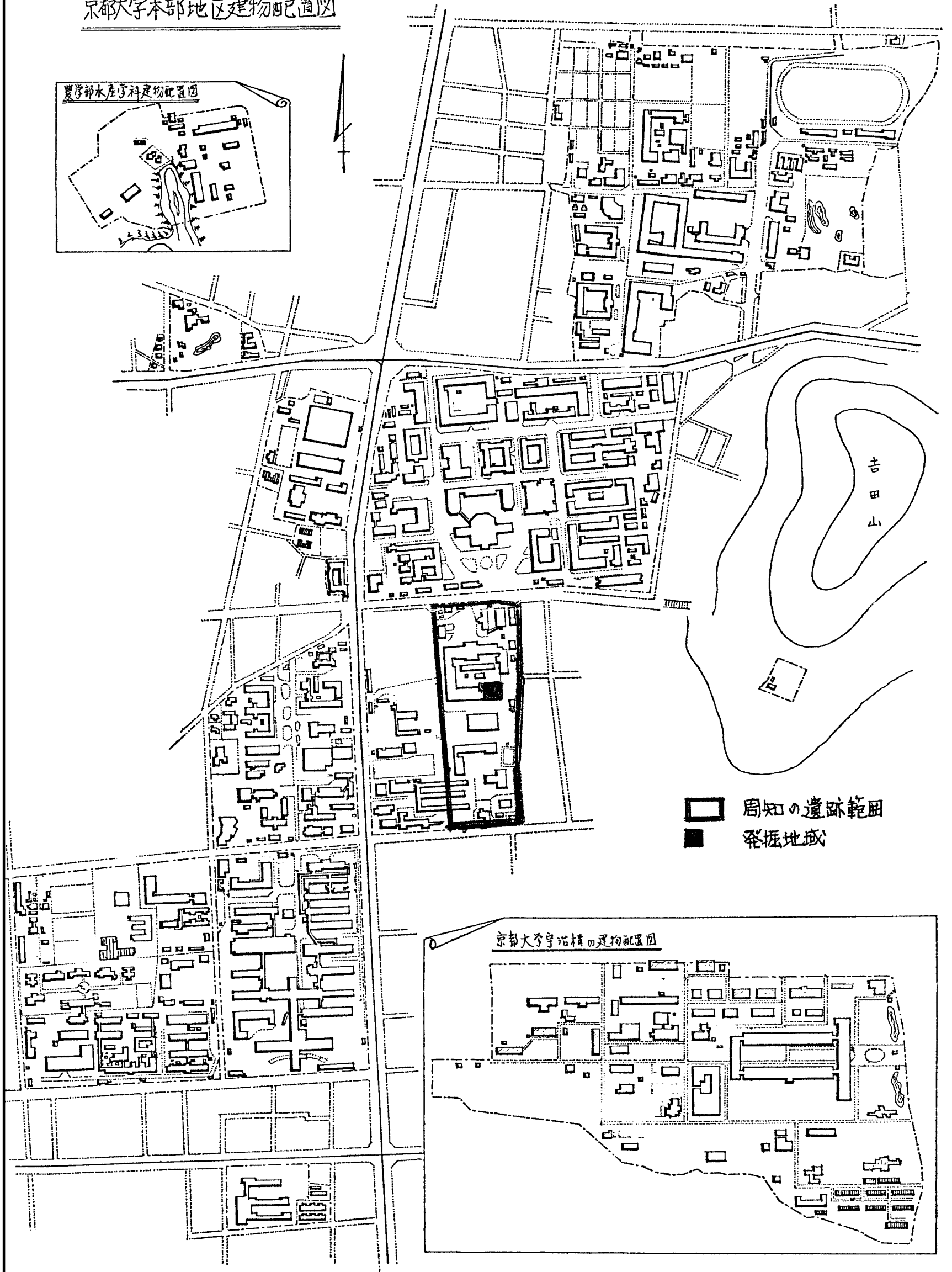
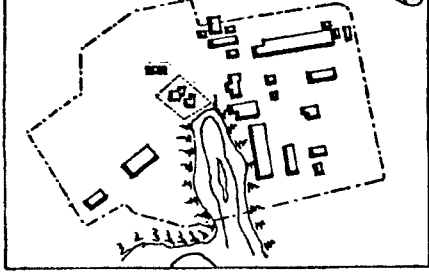




四-1

京都大学本部地区建物配置図

農学部水産学科建物配置図



周知の遺跡範囲
発掘地域

京都大学宇治橋の建物配置図

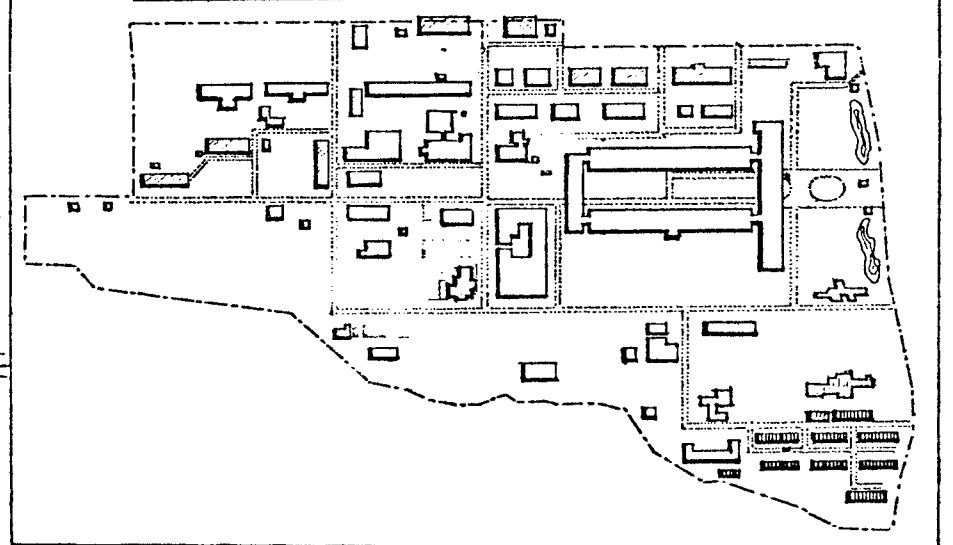
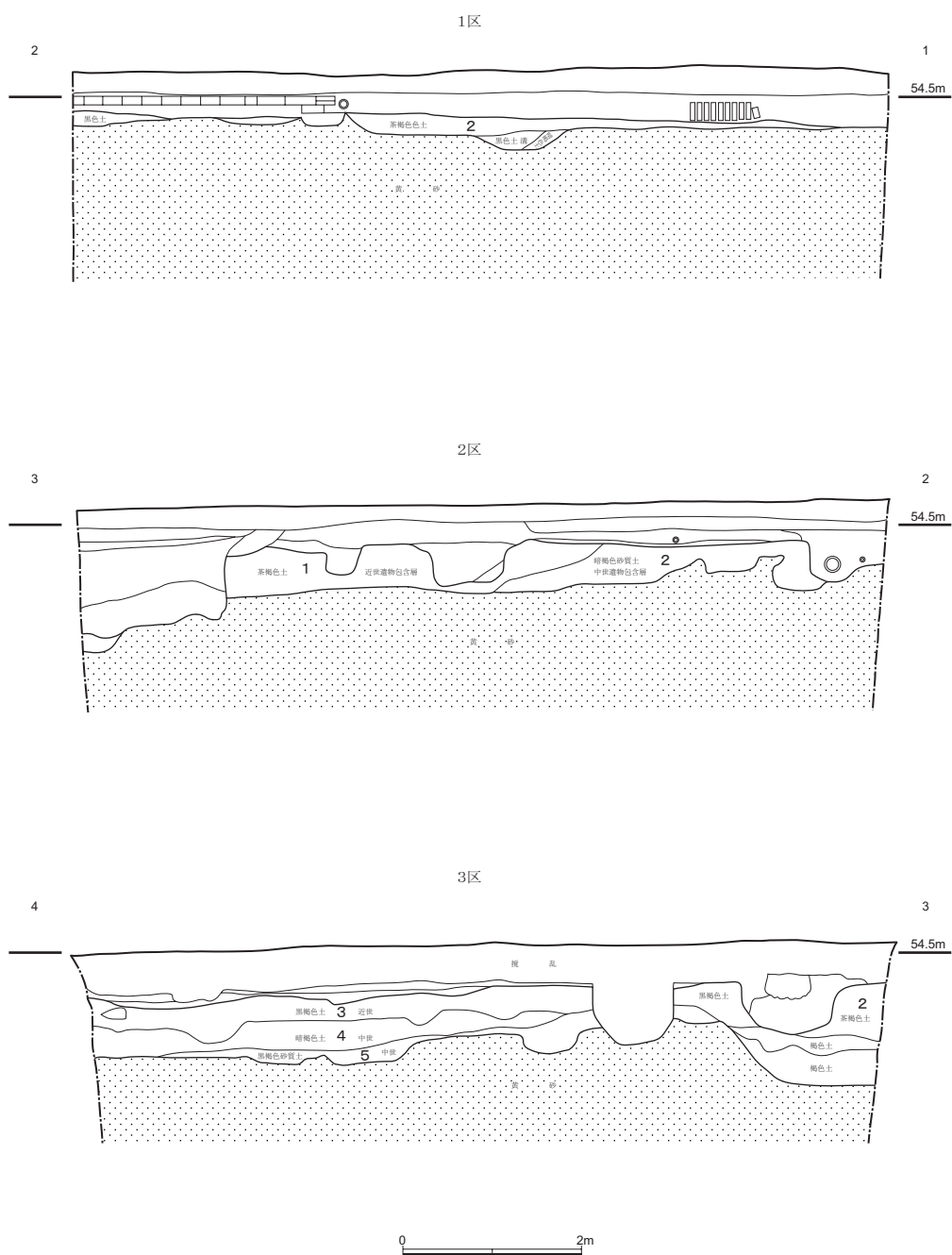


图-2



图-3 南北断面图



图—4 東西断面図

